

# 雲出川流域の発展に尽くした人々

雲出川は、その流れを利用する私たちにとって、豊かな恵みをもたらしてくれています。しかし、流域に広がる豊かな田園風景が現在の姿になるまでには、川の治水や流域の水田開発に力を尽

くした人々の姿がありました。今から400年近く前の江戸時代前期、雲出川の利水を指導した西嶋八兵衛と山中為綱。この2人の功績を紹介します。

## 西嶋八兵衛

慶長元(1596)年～延宝8(1680)年

西嶋八兵衛は、遠江国ととおのくに(現在の静岡県浜松市)に生まれ、津藩初代藩主の藤堂高虎に仕えた家臣のひとりです。



丸之内に立つ西嶋八兵衛銅像。治水や新田開発に力を注いだ功績から、「水の守護」とたたえられている

もともと祐筆ゆうひつと呼ばれる書記官の仕事をしていましたが、城づくりの名人といわれる高虎の側近にあって、各種の土木事業の専門家としてその才能を発揮しました。

平安時代の僧空海(弘法大師)が作ったといわれ、日本最大のため池である香川県の満濃池は、八兵衛が高虎の孫高俊が藩主であった讃岐国生駒家へ派遣された時、八兵衛の指揮により大規模な改修が行われました。その後も八兵衛は、同地の河川改修や新田開発に大きく貢献し、90以上のため池を作ったといわれます。

## 雲出井の整備

津藩の領地であった雲出川下流地域の村々は、川が近くを流れているものの、その水面が低く、干ばつに悩まされた地域でした。

寛永19(1642)年、正保3(1646)年と時を経ずして襲った大干ばつで津藩領内が大凶作となったことから、2代藩主藤堂高次は八兵衛に領内を

巡回させて村の復興を検討するように命じ、その進言により「雲出井」の開削が行われました。この工事は、戸木村(現在の戸木町)を流れる雲出川に堰を設けて取水し、久居・高茶屋の台地裾を通過して下流域まで水を流す、延長7,200間(約13km)に及ぶ大工事でした。

工事を陣頭指揮した八兵衛は、土地の高低差を調べるために夜間松明をともし遠望して測量し、井水の側溝斜面には竹を植えて崩壊を防ぐなどしました。また、水路は途中に7カ所の樋門ひもんを設けて水流を調節する方法をとり、高茶屋地域で高郷井・八寸・揚溝に三分して、高茶屋・雲出・垂水・藤方の村々へ水が行き渡るようにしました。以後はこの水路



八兵衛の死後、天和4(1684)年に井水を三分する高茶屋の四ッ野よつごに建てられた水分神社



八兵衛によってつくられた高茶屋分水工の現在の様子。これにより、村々に豊かな実りがもたらされた

整備によって干ばつの心配がなくなり、600ヘクタールほどの水田で1万石(1万人が1年間に食べる米の量)の増収につながりました。

八兵衛は、その後、山城・大和にあった藩領を治める奉行(城和奉行)となつて活躍し、80歳を超える年齢まで藩政の重責を担いました。